



「情」は、日本の演歌等でいう「情」とほぼ同じと考えてよいと思われる。しかし、日本語で「情を交わす」という時、多くの場合男女間の性的関係を指すように思うが、韓国文化で言う「情」は親しい人間関係にある状態を形成しているもの指す言葉である。男女間だけに限らず、人と人との近い関係性、繋がりを形成しているものを「情」と呼ぶ。

これに対し、「Uri」は極めて説明しにくい。韓国・金海市にある仁済大学を訪ね、社会福祉学科の教員と意見交換をしたことがある。その際、「Uri」「Uriナラ」という韓国語を何回か聞き、通訳をしてくれた朴貞蘭副教授に尋ねた。「Uri」は「私たち」、「Uriナラ」は「我が国」ということだと答えが返ってきた。直訳すればどうやら「Uri」は「私たち」ということを意味すると考えられる。しかし、実はもっと深い意味が隠れている。

「Uri」は様々なところで用いられる。日本語に訳して説明すると、同じ学校の卒

業生、同じ地域の出身者、同じ教会に通う信者であること、同じ会社に努めていること、さらには同じ本貫（祖先が同じ一族）であることなど、すべて「Uri」の関係である。簡単に言ってしまうとある種の共同体的集団を「Uri」という。そして「Uri」の関係性を形成する繋がりが「情」ということになる。「Uri」の最も強い関係が、家族や親戚である。この「Uri」の関係は亡くなった人までをも含むことから、親戚関係の中で祭祀が極めて大切なことになる。このため、本家の長男とその嫁には祭祀に関してとても大きな負荷がかかる。このことが理解できると、韓国の歴史ドラマ、ホームドラマを理解することが容易になる。

どうやら私は、朴ソンへ及びその家族から、「Uri」の関係にある先生として認知されたい。だから空港まで家族の誰かが出迎え、帰りには見送ってくれるのであろう。日韓関係が難しく、多くの人の反日意識が高かった時、釜山を訪れた私たちを心

配して、朴ソンへの家族・親戚が晩御飯に合流したことがある。私たち一行が、反日感情の高ぶった韓国人に巻き込まれて嫌な思いをすることがないようにという配慮である。また、私とほぼ同年輩のソンへの母親からは、私の健康のためとって漢方薬や韓国伝統茶を送っていただいたり、自ら漬けたキムチをいただいたりする。まったくの親戚付き合いである。

キムジャンが世界文化遺産に登録されているが、これには二つの文化的な意味がある。一つは、地域の女性たちが集まって共同作業としてキムチを漬けること、もう一つは出来たキムチを近所の単身高齢者等に配ることである。キムチと一緒に漬けるという行為が、参加した女性たちに対して情の形成を促し、ウリの関係が成立していく。さらに漬けたキムチをおすそ分けすることで、一人暮らしの高齢者に対しあなたは私たちとウリの関係ですよというメッセージを発信する。キムチそのものが世界文化遺産なのではなく、こうしたキムチを通じた地域における人びとのつながりが文化遺産なのである。

このことが理解できるとその延長線で、韓国の高齢者施設で見た花札という遊びは、情の交換をするためのものであり、花札を通しておばあさんたちはウリ関係を維持、強化していると考えることができる。そしてまたさらにその先で分かることは、人間同士の距離感、パーソナルスペースは、その地域の文化に大きく影響を受けるということである。

20年以上前にこんなことがあった。神奈川県内のある町で高齢者福祉のセミナーが開かれた。ゲストとして基調講演をした A

新聞社の論説委員は、町長との対談の中で 4 人部屋の老人ホームを利用したいかと尋ねた。町長は少し考えてから、4 人部屋でよいと答えたのだが、論説委員はその答えに疑問を呈した。多分、論説委員の持っているパーソナルスペースはかなり大きく、そのパーソナルスペースに他者が入ってくるのは鬱陶しいことから、個室での生活が望ましいと考えていたのであろう。しかし、それもその人の持つ文化的価値である。極めて当たり前のことだが、文化的価値は誰かに強制されるものではない。とすれば、その人、その地域の価値がどのようなものかによって、老人ホームの居室は個室がよいのか、多床室がよいのかの答えは異なってくる。ちなみに中国山西省から筆者の所属する大学の大学院留学生である楊夏麗は、一人で生活するのは寂しくて耐えられないとあって、友人と共同生活をしている。

レイニンガー (Madeline M. Leininger) は、『レイニンガー 看護論 文化ケアの多様性と普遍性』(1995 年: 医学書院) を著わした。看護における文化的価値観への配慮の必要性を説いたものだが、これは介護福祉にも当てはまる。生活する人々の持つ価値観を抜きにして、特別養護老人ホームの居室は個室がいいのか多床室がいいのかを議論しても意味のないことであると考えるのが合理的であろう。そういう意味では、先の A 新聞社の論説委員は、自らの価値が普遍的な価値であると考え、それを町長に対し押しつけていたということができる。

ここまで論じたうえで、改めて慶州ナザレ園で日本人のおばあさん達が花札をしている意味を考えてみると、面白いことが分かる。私が日本で施設内を拝見した特別養

護老人ホームは40を上回る。その中には何回も訪問していて、とても親近感のある施設もいくつか含まれている。結果的に、特別養護老人ホームを訪問した回数は、延べ数百回になるであろう。だが、日本の老人ホームで花札をしている場面に出合ったことは一度もない。日本では、少なくとも私が見てきた多くの神奈川県内の施設では、高齢者の日常のアクティビティとして、花札は行われていなかった。

韓国では、慶州ナザレ園以外でも、花札をしているおばあさん達を見かけた。最初にお会いしたのは、日本の老人福祉センターのような役割の「敬老堂」だった。おばあさん達は、小さめのポジャギ（韓国風パッチワーク）の座布団を囲んで、今では使われることのほとんどない5ウォン、10ウォンの小銭をかけて花札をしていた。2回目と3回目は、介護を提供する老人ホームだった。敬老堂のときと同じように、床の上の座布団を囲んで3~4人のおばあさん達が花札を楽しんでいた。

おばあさん達がしている花札は、昔、私たちが大学生の頃によくやっていた麻雀のような意味があると考えられる。集まったメンバーでわいわいがやがや言いながら、卓を囲む。麻雀というゲームそのものよりも、わいわいがやがやの方に言意味があったように思う。韓国の高齢者福祉施設のおばあさん達の花札も同じではないだろうか。そしてそれは、文化論的にいえば花札を通してメンバー間で情の交換を行い、ウリの関係を維持、発展させるものだということになる。このように考えると、慶州ナザレ園のおばあさん達は、日本人ではあっても韓国の文化に深く馴染んだ方々であるとい

うことができる。

クレオールという言葉があるが、一般的にこれは、宗主国が植民地を支配する際に、宗主国から現地へ移民として移り住んだ人々とその子孫を示す言葉だが、一般化していえば、異なる文化が混ざり合って新しい形で定着することを指して用いることをいう。後者の考え方にしたえば、日本人のおばあさん達が朝鮮半島で苦勞しながら長く暮らしていくなかで、朝鮮半島の文化的活動を日常生活の中に取り入れた例として、慶州ナザレ園でのおばあさん達の花札を位置づけることができるのである。

朴ソンヘや朴貞蘭に助けられながら韓国に10年近く通い、韓国の文化について考える中で「情」と「ウリ」から多くのことを教えられた。慶州ナザレ園に暮らす日本人のおばあさん達からは、「介護」は単に食事や入浴、排泄のケアをすることだけではなく、生活する人の文化的な価値を基盤とした支援でなければならないということに気付かされた。

私たちは、「介護」という時、多くの場合、食事や入浴、排泄のケアを思い浮かべる。しかし、入浴に関していえば、韓国の一般家庭ではバスタブにつかるという生活習慣がなかった。ヨーロッパにしても同じである。一般化して言えば、寒い国々では、湯をためてお風呂に入るということは、一般の庶民の生活習慣にはない。ということは、家庭ではシャワー浴が普通ということになる。シャワーを浴びながら汚れたところを洗い流すということである。となれば、入浴の介護は、その国の入浴に関する文化に強く影響を受ける。

同じことは、集団での生活、社会の在り方の議論につながっていく。

集団における親密性、親密圏のあり方は、国々によって異なるわけだが、日本、韓国、中国の東アジア 3 カ国では、人間関係における親密性がヨーロッパやアメリカに比べて強いのではないかと思われる。ヨーロッパでは、長い時間をかけて社会と個人との関係を構築してきた。その際、ダブルスタンダードに当たるものとして、教会を核としたコミュニティがある。中世後半、社会の概念が形成されていくのに従い、社会と相対する存在として個人の概念が浮かび上がる。欧米における自立した個人という考え方は、その延長にある。しかしながらもう一方でキリスト教会における信仰は、同じ教会の信者の間に信仰上の兄弟姉妹の関係をもたらす。このバランスの上に、欧米では社会と個人の関係が成立してきた。しかし東アジア 3 国の特に中国、韓国では、欧米や日本に比べ社会と個人の関係が成熟してきていない。そのため、自らの属する親密圏、集団への帰属意識が、国家への帰属意識に勝っているのではないかと考えられる。そのような中では、社会的規範が機能しない。身近な親密圏の利益を優先して人々は行動することになる。中国社会の運営の難しさ、韓国社会の課題はここにある。一方で、日本では、もともとは中国、韓国のような親密圏、集団への帰属意識の強かった国だが、次第にそれが揺らいでいき、個人主義だけが肥大化してきている。そして宗教がそれを補完する役割を果たし切れていないという特徴がある。

このような社会の中で暮しているわたし達にとって、「介護福祉」には、社会とわた

したちを繋ぐこと、支援対象者が有している個人と社会の関わりの文化や価値観をベースに支援することが、その役割の本質的な部分として有るということができそうである。

ここまでくると一つの方向性が浮かび上がってくる。「介護福祉」は、単に食事や入浴、排泄の介護を指すものであると考えるのは、適当ではない。いや、食事や入浴、排泄という生活の基本となる部分の介護を基礎としながら、その先の本人の持っている文化や価値観を支える行為なのではないか。その際、基礎的な生活の在り方だけではなく、他者との関係性といった部分まで、援助対象者の持っている文化や価値観に基づき支えることが「介護福祉」の本質的なあり方なのではないだろうか。

このように考えることが適当だとしたら、現在、介護福祉に関して議論されている様々な事柄についての立ち位置は、これまでの議論とは異なったものになる可能性が高い。

例えば EPA（経済連携協定）に伴う介護人材のフィリピンやマレーシアからの受け入れの問題、あるいは技能実習生として海外からの介護職員の受け入れをどう考えるのか。高齢者福祉の多くの現場では、介護福祉の人材確保が難しいことから海外からの人の受け入れに積極的になっているところもあるし、マスコミもそうした論調を後押ししている状況にある。しかし、介護福祉が援助対象者の持っている文化や価値観をベースとした上で支援する専門性であるとするなら、文化や価値観が共有出来ない外国人に介護を全面的に頼ることは難しいということになる。

また、介護福祉の専門性をどのように考えるのかということに関し、幾つかの方法論が模索されている。一つは、認定介護福祉士と呼ばれるものであり、もう一つは段位制度と呼ばれている。いずれも介護福祉の具体的な技術の向上に専門性の意義を求めた取り組みとして位置付けることが適当であろう。しかしそれは、食事や入浴、排泄の介護の技術を高めるという方向ではな

いのか。あるいは医療的ケアへの対応は、医療依存度の高い援助対象者が高齢者施設や在宅に増加してきている現状が求めているニーズであっても、介護福祉の専門性とは、本質的にマッチしないと考えたほうがよいのではないか。

以下、章を改めて考えることにする。

(以下、次回へ)